東京女子医科大学病院の
無痛（鎮痛）分娩について

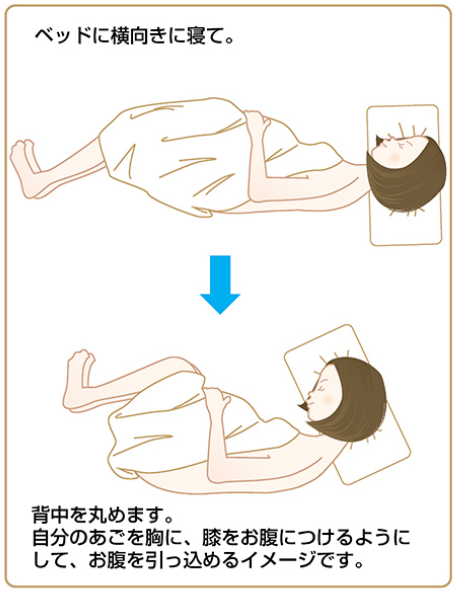
■当院での無痛（鎮痛）分娩

当院では麻酔科の医師が脊髄幹麻酔（硬膜外麻酔あるいは脊髄くも膜下麻酔併用の硬膜外麻酔）による鎮痛を担当します。この方法は現在、お産の痛みを和らげるために世界中で最も一般的に用いられる無痛（鎮痛）分娩法です。無痛（鎮痛）分娩は、分娩すべての痛みや感覚がなくなるのではなく、痛みを和らげるものです。赤ちゃんの下降感や子宮の収縮をある程度感じ、いきむ力を残しながら分娩を進めます。また、状況によっては痛みを感じながら出産することもあります。麻酔の効果には個人差があることもご理解ください。

脊髄幹麻酔を用いる分娩では、お母さんへの麻酔薬の影響は少ないとされており、さらに薬が胎盤を通って赤ちゃんへ届くことはほとんどないと言われています。このため、「麻酔なし」の分娩と「無痛（鎮痛）分娩」で、うまれてくる赤ちゃんへの影響に大きな差は認められておりません。とくに、無痛（鎮痛）分娩による帝王切開が必要となる頻度は上昇しないことが報告されています。

■実際の無痛（鎮痛）分娩の流れ

当院では主に産科医師による計画分娩が無痛（鎮痛）分娩の開始となりますが、このほかにも陣痛の発来によって無痛（鎮痛）分娩の開始となることがあります。脊髄幹麻酔の開始の際には下記のような体勢を取っていただき、麻酔科医師が背中の麻酔を行います。その後は、麻酔の効果を判断しながら麻酔科医師が頻回にベッドサイドにお伺いし、主に硬膜外カテーテルを用い分娩にともなう痛みを和らげます。



©日本産科麻酔学会

硬膜外麻酔の効果は 20-30 分して徐々に現れ、痛みが遠のくとともに足が少し痺れた感じになることがあります。このため、無痛（鎮痛）分娩中にトイレなどに移動する際は助産師と一緒に移動していただきます。無痛（鎮痛）分娩中、お食事を召し上がれませんが、飲水は清涼水（水、お茶、コーヒー、スポーツドリンク）に限り、可能です。ただし、牛乳やミルク、つぶつぶの入ったジュースなどは食事の部類にはいるので、摂取不可とさせていただきます。

■無痛（鎮痛）分娩のメリット

お産の痛みを和らげることができ、お産後の回復が早い。
静脈麻酔による無痛分娩と比較して胎児への影響が少ない。
会陰切開や傷の縫合の際の鎮痛になる。

■脊髄幹麻酔で予測される合併症

頻度が多いもの：低血圧(14%)、排尿困難(不明)、掻痒、発熱(12-30%)、ふるえ(20%)
子宮収縮の増加、赤ちゃんの心拍数の増加(10-20%)、足の動かしにくさ
稀に起こるもの：硬膜穿刺後頭痛(1-2%)、局所麻酔薬中毒(0.03-0.1%)、
神経障害(2 万-20 万に 1 例)、高位脊髄くも膜下麻酔(0.006%)、硬膜外血腫(15-22 万に 1 例)・膿瘍(0.3%)

■分娩への麻酔による影響

オキシトシン（陣痛促進剤）使用の増加(2-3 倍)
分娩時間（分娩第Ⅱ期：子宮口全開大から赤ちゃん誕生まで）の軽度な延長
鉗子・吸引分娩の増加（10%程度）

■緊急時

母体や胎児に緊急で手術が必要になった際にはチームを挙げて事態の改善にむけて全力を尽くします。

■その他

当院では無痛（鎮痛）分娩時のカテーテル挿入は麻酔科医師が行います。担当する麻酔科医師は 24 時間待機しておりますが、夜間・休日などに緊急手術の対応を行っている場合に無痛（鎮痛）のご依頼を受けた時には、兼務を回避するために無痛（鎮痛）の開始が遅れることがあります。いずれの場合においても患者さんの安全を最優先し、ご説明のうえで診療を行いますのでご理解いただけますようにお願い申し上げます。

■費用

無痛（鎮痛）分娩にかかる費用については、病院会計窓口までお問い合わせください。

■おわりに

近年、お産の痛みを和らげるための鎮痛方法として無痛（鎮痛）分娩が発達してまいりました。東京女子医科大学病院では、お母様と赤ちゃんのふたつのお命の安全に配慮し、無痛（鎮痛）分娩を、硬膜外麻酔を中心とした脊髄幹麻酔にて行っております。麻酔科医師が、産科医師・助産師と協力し、無痛（鎮痛）分娩の麻酔を担当させていただきます。麻酔についてのご質問は、病院代表電話番号 03-3353-8111 から麻酔科までご連絡ください。ご出産までまごころをこめて診療させていただきますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

以上

20231201 Ver. 1.0

東京女子医科大学麻酔科